



TITLE:

Postictal psychoses : A comparison with acute interictal and chronic psychoses. (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Kanemoto, Kousuke

CITATION:

Kanemoto, Kousuke. Postictal psychoses : A comparison with acute interictal and chronic psychoses.. 京都大学, 1997, 博士(医学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202236>

RIGHT:

氏 名	かねもとこうすけ 兼本浩祐
学位(専攻分野)	博士(医学)
学位記番号	論医博第1607号
学位授与の日付	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	Postictal psychoses: A comparison with acute interictal and chronic psychoses. (発作後精神病状態——発作間歇期急性・慢性精神病状態との比較)
論文調査委員	(主査) 教授 柴崎 浩 教授 木村 淳 教授 三好 功峰

論 文 内 容 の 要 旨

目的：てんかんに随伴する精神病としては、発作の抑制ないしは減少と同時に出現するいわゆる交代性精神病や慢性の精神病状態が古くから注目され研究対象となってきたが、発作後に出現する精神病状態については、発作後もうろう状態との混同から近年まで分析の対象となつてこなかった。我々の研究は精神症状を特にきたしやすくてんかんである側頭葉てんかんにおいて、発作後精神病状態を、急性交代性精神病状態・慢性精神病状態との比較において検討したものである。

対象と方法：国立療養所宇多野病院関西てんかんセンターに1993年までに登録されたてんかん患者の内、複雑部分発作および脳波上側頭部焦点を示し、IQ 60以上で15歳以上の808人の患者を側頭葉てんかんの母集団とした。頻回で短時間の突然始まる激しい運動性の不穏を主徴とするてんかんを示す患者は前頭葉てんかんの可能性が高いため対象から除外した。入院ないしはメジャートランクライザーの投与を必要とするほど程度が重く、発作そのものないしは発作後もうろう状態とは明瞭に区別しうる、幻覚、妄想、思考障害、感情障害を呈した症例を精神病状態とした。104人の側頭葉てんかんの患者がこのような精神病状態を呈したが、内、30人が発作後精神病状態（P群）、33人が急性交代性精神病状態（I群）、25人が慢性精神病状態（C群）を呈した。精神病状態の評価は、31項目のSAPS（Scale for Assessing Positive Symptoms）を基本とし、これに発作後精神病状態についての予備調査で見いだされた項目を補足した。5人以上の患者が示した項目のみを検討項目としたところ17項目が結局分析対象として抽出された。

結果：P群における30例中15例で、発作終了後、精神病状態発現以前に潜伏期が存在し、いったん正常な精神状態に戻ってから精神病状態が発現したことが確認された。P群の臨床的特徴は、精神病状態の出現年齢が比較的高いこと、自律神経性前兆が少なく精神性前兆が多いこと、また睡眠時大発作が比較的多いことなどであった。C群・I群に比べたP群の最大の特徴は精神病理学的所見であり、注釈幻聴、妄想知覚といったSchneiderの1級症状にあたるような項目はP群において有意に少なく、誇大妄想、宗教妄想、発話促迫といった躁の気分を背景とした精神病状態、精神性前兆と直接的な関係のある心的二重視、死の促迫感、親近感の変容などの項目は有意に多かった。I群とC群にはいずれの項目においても大きな差異

は出現しなかった。

考察：精神病理学的にはP群は、I群およびC群とは非常に異なった特徴を示すことが明らかになった。即ち、分裂病様の精神病状態を示すのはI群およびC群のみであり、P群は躁的気分を背景として、誇大的・宗教的な妄想が身体の環界との融合感とともに語られるのが特徴的であった。こうした結果から、交代性精神病および慢性精神病については、Wolfの発作伝播経路変更説が妥当であるが、発作後精神病についてはWieserの脳辺縁系限局発作重積状態説の方が妥当ではないかという考察を行った。発作後精神病は、Landoltの交代性精神病、Slaterの慢性精神病と並ぶ重要なてんかん性精神病でありながら、今世紀中葉以降はてんかん学の文献から忘れられており、僅かにLogsdailらが最近検討を加えているだけである。その点で本研究はてんかん性精神病の研究に際して大きな意味を持つものであると考える。

論文審査の結果の要旨

てんかんに随伴する精神病のうち、発作後に出現する精神病は、発作後のもうろう状態との関連で、十分に明らかでない点が多い。その病態を明らかにする目的で、側頭葉てんかん患者で精神病状態を呈したもののうち、発作後精神病状態（P群）を主な研究の対象とし、急性交代性精神病状態（I群）、慢性精神病状態（C群）をあわせて検討した。精神症状の評価は、陽性症状判定尺度（SAPS）によった。発作後精神病状態（P群）のうちの半数は、発作後、いったん正常な精神状態に戻ってから精神病状態が出現することが確認された。また、精神病の出現年齢が高いこと、自律神経性前兆が少なく、精神性前兆が多いこと、睡眠時大発作の頻度が高いこと、躁的な気分を背景とすることが明らかにされた。一方、急性交代性精神病（I群）、慢性精神病状態（C群）は、精神分裂病様の精神症状を示すもので、発作後精神病状態（P群）とは、明らかな臨床的な差異があることが示された。本研究では、発作後精神病の特殊性を明らかにし得たが、その病態は、脳辺縁系における限局発作の重積状態との関連があるものと考えられた。

以上の研究は、てんかん精神病的な臨床的理解に貢献し、その病態の解明に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成9年2月28日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。